



学生の発音診断の分析結果から観る日本人学習者に  
共通する英語発音の問題点

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 太一郎, Minami, Taichiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/5446">http://hdl.handle.net/10458/5446</a>

# 学生の発音診断の分析結果から観る 日本人学習者に共通する英語発音の問題点

南 太一郎

## Common Persistent Problem Sounds and Features of Pronunciation by the Japanese Students of English

Taichiro MINAMI

### I. はじめに

本稿の目的は、平成 28 年度の学部改組計画を承けて、平成 20 年度からのカリキュラム改正に伴って新たに開講された「英語学演習 I」において最終学習評価方法として課してきた学生の発音診断結果分析の、特に同一の診断文を用いた最近 3 年間の、データから得られた英語音声に関する日本人学習者に共通する問題点を再確認しようとするものである。その際、かつて同様の趣旨で分析した結果を報告した現筆者の論文内容とも突き合わせながら、その異同を論じようと思う。

現筆者の教員養成系学部における英語教師としての残り時間も終わりに近づいてきたので、上記の検討過程を経て日本人学習者に共通する英語音声の問題点を筆者なりに総括しておきたい。それによって、今後何らかの参考事例を供することが出来れば幸いでもある。

### II. 学生の発音診断の分析結果と問題点の再確認

「英語学演習 I」という授業の趣旨とその概括的内容は別紙（「英語学演習 I」における実践的音声指導の授業研究『宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要 第 23 号』2015 年 3 月）において詳述しているのでここでは繰り返さない。以下ではこの科目の最終学習評価方法として平成 24 年度から課してきた Dauer (1993) に掲載されている“Diagnostic Speech Sample”の Part I: Formal Reading を用いた学生の発音診断結果分析の過去 3 年間のデータから得られた英語音声に関する日本人学習者に共通する問題点の再確認を行なう（この発音診断用の文章はテープ音源にも収録されている）。現筆者は既にこれまでも学生の英語発音の問題点について考察を行なっている（「日本人学生の英語発音上の問題点への一考察

(1) 1986)。28 年前の少数の英語専攻学生に関する考察であり診断に用いた文章も今のものとは違っているが、今回の発音診断との比較に適宜援用してみたいと思う。もし共通する発音の誤りや問題点が散見されるとするならば、それらは当に日本人にとって“persistent problem sounds”だということになるであろう。

Learning to speak a foreign language fluently and without an accent isn't easy. In most educational systems, students spend many years studying grammatical rules, but they don't get much of a chance to speak. Arriving in a new country can be a frustrating experience. Although they may be able to read and write very well, they often find that they can't understand what people say to them. English is especially difficult because the pronunciation of words is not clearly shown by how they're written. But the major problem is being able to listen, think, and respond in another language at a natural speed. This takes time and practice.

/lɜːnɪŋ tə 'spi:k ə 'fɔːm 'læŋgwɪdʒ 'fluəntli ən wɪθaʊt ən 'æksent| 'ɪzənt 'ɪzi| ɪn 'moʊst  
 edʒə 'keɪʃənəl 'sɪstəmz| 'studənts ,spend 'meni 'ɪə-z 'stədiɪŋ grə'mæɪtɪkəl 'ru:lz| bət ðer 'daʊnt  
 get 'mɔɪf əv ə 'tʃæns tə 'spi:k| ə'reɪvɪŋ ɪn ə 'nu 'kʌntri| kən bi ə 'fræstreɪtɪŋ ɪk'spɪəriəns|  
 əðəʊ ðer meɪ bi 'eɪbəl tə 'rɪd ən 'raɪt veri 'wel| ðer 'ɔfən 'faɪnd ðət ðer 'kænt  
 əndə'stænd wɔt 'pɪpəl 'seɪ tə ðəm| 'ɪŋɡlɪz ɪz ə'speɪʃəli 'dɪfɪkəlt| bɪkəz ðə prə'pɒnsi'eɪʃən  
 əv 'wɜːdʒ ɪz 'nɒt 'kliːəli 'ʃu:n bət 'hau ðeə 'rɪtən| bət ðə 'meɪdʒə 'prɒbləm| ɪz 'bi:ŋ 'eɪbəl  
 tə 'lɪsən| θɪŋk| ən rɪ'spænd ɪn ə 'nədə- 'læŋgwɪdʒ| ət ə 'næɪtʃəl 'spɪd| ðɪs 'teɪks 'taɪm ən  
 'præktɪs/

「英語学演習 I」受講対象学生は、A) 学校教育課程中学校教育コース英語教育専攻学生と初等教育の英語副専攻学生、及び B) 人間社会課程言語文化コースの学生（高等学校 1 種免許状用選択科目）であり、過去 3 年間の受講学生の数と内訳は次の通りである。

- ・平成 24（2012）年度：A) が 10 名、B) が 6 名、計 16 名
- ・平成 25（2013）年度：A) が 12 名、B) が 8 名、計 20 名
- ・平成 26（2014）年度：A) が 12 名、B) が 9 名、計 21 名

シラバスに掲げてある最後の授業時に IC レコーダに診断文を録音し、それを授業担当者が耳で聴いて個人別チェックシートに問題箇所を記入する形式で診断・評価を行なった。録音音源は一人最低 3 回程度は聴いたが、場合・個所によってはそれ以上聴いたものもある。希望で学生は 2 回まで録音を行なえるよう配慮し、そのうち良い方を診断対象とした。又、平常授業時にも教室で何回かに分けて発音留意点を示しながら診断用文章を全体練習した。

先ず以下に問題音の生じている箇所を平成 24 年度、25 年度、26 年度の順に診断文上で示す。その際、各年度の半数以上の学生の発音が問題だった箇所は、綴り字を**太字**・*斜体字*・下線で示し、半数以下の場合は斜体字・下線のみとした。+は余分な音が付いている場合で、( ) はリエゾン、( ↘ ) は話調の問題箇所である。

**[H24]** Learning to speak a foreign language fluently and without an accent isn't easy. In most educational systems, students spend many years studying grammatical rules, but they don't get much of a chance to speak. Arriving in a new country can be a frustrating experience. Although they may be able to read and write very well, they often find that they can't understand what people say to them. English is especially difficult because the pronunciation of words is not clearly shown by how they're written. But the major problem is being able to listen, think, and respond in another language at a natural speed. This takes time and practice.

**[H25]** Learning to speak a foreign language fluently and without an accent isn't easy. In most educational systems, students spend many years studying grammatical rules, but they don't get much of a chance to speak. Arriving in a new country can be a frustrating experience. Although they may be able to read and write very well, they often find that they can't understand what people say to them. English is especially difficult because the pronunciation of words is not clearly shown by how they're written. But the major problem is being able to listen, think, and respond in another language at a natural speed. This takes time and practice.

**[H26]** Learning to speak a foreign language fluently and without an accent isn't easy. In most educational systems, students spend many years studying grammatical rules, but they don't get much of a chance to speak. Arriving in a new country can be a frustrating experience. Although they may be able to read and write very well, they often find that they can't understand what people say to them. English is especially difficult because the pronunciation of words is not clearly shown by how they're written. But the major problem is being able to listen, think, and respond in another language at a natural speed. This takes time and practice.

誤発音の内容は図示されたもので自明の場合も多いと思われるが、平成 24 年度を雛形として少し詳しく観てみよう。更に、24 年度には顕れない誤りは追加で指摘することとする。発話者 16 名の半数以上（或いはそれに僅差）が何らかの間違い発音をしている個所を太字で記す。又、適宜カッコ内に誤りの実数を示した（25 年度、26 年度も含めた詳細は以下の表 1 を参照

のこと)。

- **Learning** : 母音[ɔ̃]が日本語母音[a]のように発音されている (16 人中 14 人 ; 以下数字のみ表示)
- **foreign** : [f]が唇歯摩擦音の調音になっておらず、日本語「ハ行」の音[ɸ]のようにになっている (11)
- **language** : 母音[æ] (13) 及びその後の[ŋgwɪ]の子音と弱母音の連続が不正確 (9)
- **fluently** : [fl] (但し、半数に 1 名足りない 7 名) で唇歯摩擦音の直後に側音[l]が続く際の両者の発音不正確及び[tɪ]において、歯茎閉鎖音の調音から舌端を歯茎から離すことなく側音に移行する動きが不十分で[l]が[r]の様に発音される (13)
- **systems** : [sɪ] (7 名) で日本語[ʃɪ]のように前母音の直前の[s]がその影響で日本語の[ʃ]になっている
- **years** : 半母音・渉り音の[j]そのものの調音 (12) と、その直後の高 (狭) 母音[i]及び r-colored の[ɔ̃]への滑らかな移行ができていない (3)
- **don't** : 二重母音[ou]の調音が不正確で、[o:]乃至は日本語母音/オ/で発音されている (9)
- **Arriving** : ing 形末尾の軟口蓋鼻音[ŋ]が軟口蓋閉鎖音を伴って[ŋg]と発音されている (8)
- **frustrating** : 語強勢は母音[a]を核音とする第一音節にあるが、それが第二音節におかれている (13)
- **experience** : 米音では[l]と短母音で発音されるか、或いは[i:]とやや長母音的に発音されるものが、[e]で発音されている (8)
- **understand** : 母音[æ]が日本語母音[a]のように発音されている (13)
- **English** : この語では、軟口蓋鼻音[ŋ]の直後に軟口蓋閉鎖音[g]が続かなければならないのだが、それが落ちている (8)
- **especially** : 側音[l]が音節頭に来て clear で発音されるべきところが不正確で[r]の様に発音される (8)
- **pronunciation** : 上記“systems”と同様に、直後の前母音[l]の影響で[sɪ]ではなく[ʃɪ]になっている (8)
- **words** : 上記“Learning”と同様に、母音[ɔ̃]を日本語母音[a]のように発音している (8)
- **clearly** : [kl]で軟口蓋閉鎖音の直後に側音[l]が続く際の両者の発音が不正確 (側音は無声化[l̥]も起こす) (8)、側音[l]が不正確で[r]の様に発音される (11)
- **problem** : 閉鎖音とその直後の無声化する[r]への渉りの発音は日本人には苦手なものの一つで不正確 (9)。同じく有声閉鎖音[b]の直後に側音[l]が続く場合も不得手 (9)
- **listen** : 語頭の側音[l]の調音が不正確になっている (10)
- **respond** : 英語では、音節頭の無声閉鎖音 ([p, t, k]) は、その直後に強い息 (= 氣息 ; 帯気 ; 含気 aspiration) を伴って発音されるが、閉鎖音の前に歯茎無声摩擦音[s]がある場合には aspiration は生じない。これが無視されて帯気音として発音されている (14)
- **respond in another** : リエゾン (liaison) が滑らかにできていない (14)
- **language** : 上記同様、母音[æ]及びその後の[ŋgwɪ]の子音と弱母音の連続が不正確 (15)
- **natural** : 母音[æ]が日本語母音[a]のように発音されている (13)
- **takes** : 上述した通り、英語では、音節頭の無声閉鎖音 ([p, t, k]) は、その直後に強い息

(aspiration) を伴って発音される。この語の場合は[tʰ]と強い帯気を伴って発音されるべきところがそうになっていない (14)

- **time** : 同上 (15)
- **practice** : 上記“problem”と同様、語頭の閉鎖音とその直後の無声化する[r]への涉りの発音が不正確 (10)、及び直後の母音[æ]が日本語母音[a]のように発音されている (10)

以下の表 1 では、上記の発音間違いを含む語を再度一覧表に纏めた。間違いの出現数(人数)が半数以上で顕著な問題音には網掛けを施した。但し、勿論半数以下でも上記の様に問題だと思われる音は多く存在するが、煩雑なのでそれらは表には掲げなかった。上記の診断文上に図示したものを参照願いたい。

表 1 発音診断結果から見た代表的問題音一覧(網掛け部分)

	24 年度 (2012) 【X/16 名の事例】		25 年度 (2013) 【X/20 名の事例】		26 年度 (2014) 【X/21 名の事例】 *	
<b>Learning</b>	14		16		14	
<b>foreign</b>	11	13	5	15	5	9
<b>language*</b>	10		19		12	
fluent <b>ly</b>	7	13	4	5	7	6
<b>systems</b>	7		1		2	
<b>years</b>	12		11		14	
<b>don't</b>	9		0		2	
<b>studying</b>	5		3		8	
gram <b>mat</b> ical	3		12		3	
<b>Arriving</b>	8		7		7	
fr <b>u</b> strating	13	4	9	10	6	5
exper <b>ie</b> nce	8		11		9	
under <b>st</b> and	13		15		11	
<b>Eng</b> lish	8		9		3	
especial <b>l</b> ly	8		6		3	
pronun <b>ci</b> ation	8		6		3	
<b>w</b> ords	8		5		5	
<b>clear</b> ly	8	11	6	8	3	5
major	5		15		10	
<b>pro</b> blem	9	9	12	10	11	9
be <b>in</b> g	7		7		6	
<b>l</b> isten	10		8		3	
res <b>po</b> nd	14		13		6	
<b>lan</b> guage*	15		17		14	
n <b>at</b> ural	13		11		8	
<b>t</b> akes	14		18		6	

<u>time</u>	15		18		6	
<u>practice</u>	10	10	13	15	8	11

\*language は個々の音ではなく複数の問題音の累計数を示す

実際は、細かい問題点は他にも多くある。しかし、単音の問題と共に、強勢、リズム、イントネーションといった調律特徴を含めた「英語らしさ・英語らしい韻（ひびき）」という点での難点も多い。又、授業中に意識を喚起して練習を行なったことで矯正効果が出、評価録音時には一時的に顕著に発音の癖が頭われてきていない箇所があるであろう。一時的か恒常的かまでの厳密な突き合わせは行なっていない。一先ずは各学生が自分なりに練習を積んだ結果として、緊張しながらも取り敢えず最善の形で IC レコーダの前で発音した結果なので、サンプルとしての妥当性は保証されていると判断して佳いであろう。

### III. 発音診断の分析結果と共通する問題点を踏まえた考察

次に、総括として音の分類別に、上記した現筆者の以前の考察とも適宜比較しながら問題点（共通点と相違点）を検討してみたいと思う。

#### 1. 母音

##### 1) [ɜ:]

診断文においては“learning”及び“words”に含まれる rhotic vowel で、厳密には強音節に生じ[ɜ:]という表記が望ましい。が、この r-colored vowel が不正確な調音で日本語の/ア-/のような母音で発音されている場合が多かった。前回の考察では「他の音との対比でなくそれ自体として表われる場合、今回に限ってはそれ程の問題にはならなかった。ただ2例 (err, workaday) において、開口度の広い日本語の[ア]に類する音で発音されたものがあつたことからすると、たまたまテープ録音時に意識して正確に調音された可能性もあるが、それにしても一度ある程度修得されれば意識的に発音出来るようになることを示しているのかもしれない。」(p. 47, 「2. 3. 長母音」)と軽く扱っているが、今回の分析結果からも、又、その他の数多い経験からも、この音は日本人英語の母音発音の中でも[æ]と並んで双璧とも云える誤発音を誘発する音である。只、既に他所で詳細に分析した通り（「アメリカ英語のいわゆる「そり舌音」再考」『宮崎大学教育学部紀要人文科学 61 号』1987年3月）、この音のアメリカ英語における調音は、原理さえ理會して口腔内の筋肉の運動感覚的内省を上手に用いるコツを知れば決して習得不可能な音ではなく、寧ろ容易に発音習得ができる音である。問題は定着化までの運動感覚的フィードバック手法を用いた地道な繰り返し練習を行なうかどうかである。今回も3年間を通じて一番間違いの頻度が高いものの一つであり、授業中にも意識的に練習をさせたにも拘わらずその成果が定着しないのは学習者側の発音内在化への過程の問題が大きいのではないかと考えられる。

##### 2) [æ]

“language”、“grammatical”、“natural”、“practice”に含まれる半高・前舌母音で日本語/エ/と/ア/の間からやや/ア/寄りの音である。ある意味では上記の[ɜ:]よりも調音

が難しい面があるかもしれない。前回の考察では、「短母音中最も誤りの頻度が高く、後々まで繰り返されるもの。日本語の[ア]（や時として[エ]）の様に発音される。」(p. 46)、「[æ]は特に、正確に調音される為には、日本語の[ア]を基準に考えると、最もその調音プロセスが複雑である為、聴取時の対比は出来やすくても、発音時にはむしろかしくなるものと考えられる。」(pp. 46-47)と述べられ、纏めの「5. おわりに」の中でも再度「ここで重要なことは、以上述べてきた発音の誤りがすべて同程度の誤りではなく、主ずと程度に大小、軽重があることである。例えば、短母音中、[i, æ, u]を取り上げたが、そのうち最も重大なものは[æ]であり、・・・」(p. 51)と締め括られている。この音の調音も日本人には至難であるように云われるが、一度運動感覚的内省で口腔内の筋肉の緊張や口の開き、舌の位置等に意識が行きさえすれば、あとは定着化の問題であり、そこが発音習得では一番高い障壁かも知れない。音質的には所謂 D. Jones の「第一次基本母音」の No.4 に近いと云ってよく、No. 3 の半高[e]と No. 4 の[a]の中間で No. 4 寄りなので、調音のポイントは、前母音の開口度が大きくなるにつれ舌の最高位は次第に中寄りになるとはいえ、「基本的に舌の位置を前寄りに残す（[e]の際の舌の緊張度と前寄りの位置を出来るだけ保つ口構えする）」ことで、開口度を[e]から次第に上げながら音色の微調整を行ない、それと同時に唇を横に引く緊張も加えるようにすることが最重要である。

### 3) [i:/ɪə]

“experience”の強勢音節の母音は普通米音では[i]乃至は[i:]のように発音される（英音では[iə]）。この音自体が難しいのではなく、綴りに引き摺られて[e]或いは[ɛ]のような母音で不正確に発音されている。以前の考察では、「2. 3. 長母音」の 1) [i:]の記述中に、「短母音[i]と比較して緊張を伴った音であるということが意識されずに発音された瞬間に日本語の[イ][エ]に近い、英語音の[i:]としては緊張の少ない音になってしまう。習得困難な音ではないが、習慣化する必要がある。」と指摘がある（p. 47）。発音表記としては米音は飽くまで[i]となっているが、実際にはこの音は強母音で強勢を伴うと長めに発音され、[i:]に近くなる。どちらの発音であれ強勢を置いて正確に調音することが重要である。

### 4) [ou]

“most”, “don’t”及び“shown”に生じるこの二重母音の誤発音にはバラツキがあり、必ずしも重度というものではないが、[o]から[u]への移行が滑らかに行かず、中途半端な/oʊ/に近い短母音か/ア/に近い第一要素から/ウ/へと移行する重母音の発音であったりする。以前の考察では、「a) 長母音[o:]の様に発音される。二重母音であるという意識が欠けている場合である。 b) 第一要素[o]が、実際よりは開口度の大きい[a]寄りの音に発音される。第二要素の円唇化を伴っている狭母音[u]への涉り (glide) が正確に出来ていない場合である。」(p. 48)と記述されている。

## 2. 子音

### 5) [f]

前回の考察でも「語頭、音節頭に表われる場合に、圧倒的に摩擦力と持続時間が少ない」と記述されているが（p. 49）、今回も 24 年度が特にその傾向が強かったものと思われる。後の 2 年間はそれ程の誤発音が確認されなかったのは、意識の喚起が成功した例であろうか。



## 6) [r]

前回の考察では単独での誤発音の記述はないが、子音群 (consonant clusters) として後述する際に関わりが出てくる。単音としての米音子音の[r]は、上述した既発表論文 (南 (1987)) で詳細に指摘した通り、音節主音的[l̥](=母音[ɜ]/[ə])が音節副音的子音として実現される場合であり、従来 frictionless fricative /r/ 或いは approximant と分類される /r/である。調音方法は母音の[ɜ]/[ə]と基本的には同じで佳く、語頭においては強い円唇化を伴って素早く任意の次の音節主音に涉って行く発音をすれば十分である。結局、母音の場合の調音と同じように、原理を理会したあとの運動感覚的内省による習慣化をどこまで行なって定着させられるか、ということが鍵である。

## 7) [ŋ]/[ŋg]

間違いの頻度が割合に高いものの一つがこの何れかの場合で、圧倒的に多いのは語末に生じる”-ing”形[ŋ]が[ŋg]と誤発音されるものである (Learning, studying, Arriving, being)。もう一つは“language”と“English”の時のように、逆に[ŋ]では誤りで[ŋg]とならなければならない場合である。“singer” [ŋ]---“finger” [ŋg]の場合のように派生語かどうかで区別の基準になるものもあるが、多くは単語毎に発音を確認して習得することを怠ってしまうと何時までも不正確な発音が矯正されない。以前の考察では「日本語において鼻濁音の習慣がない地方 (宮崎も入る) の学生にとって、この両者を正確に区別することはむずかしく、特に[ŋ]の発音を誤りやすい。つまり[ŋ]であるべき場合に[ŋg]となってしまう誤りである。又、[ŋ]を意識し過ぎると、[ŋ---g]の対比において本来[g]であるfinger[fiŋgə(r)]などが[g]を落として誤って発音されることにもなる。」(p. 50) と指摘している。

## 8) [-li]

副詞語尾の“-ly”の側音は語末であっても「明るい l」(clear /l/) で発音される。日本人の誤発音の典型は、この側音の clear---dark の発音差ではなく“l” vs. “r”に関係している。つまり、“fluently”, “especially”, “clearly”のような場合に軒並み舌端が歯茎から離れて中途半端な[r]のような音で発音されてしまうのである。只、これも意識の喚起と運動感覚的内省の度合いが進めば漸減すると云え、3年間の結果はその方向を示している。尚、以前の考察にはこれに重なる指摘はなされていない。

## 9) [si]

日本語では前母音/イ/の直前のサ行音は[s]ではなく[ʃ] (或いは[c]) で表記されるような音であり/シ/で発音される。しかし、英語においては[s]は直後の母音が何であれ常に同じ[s]で発音されるので、“systems”や“pronunciation”を/シ/で発音すると誤りとなる。只、上記同様これも意識の喚起と運動感覚的内省の度合いが進めば漸減することは3年間の結果が示している。以前の考察では、[ʃ]に関して類似の記述がされている(「日本語の[シ, ジ]よりは円唇化を伴って発音されるという点が、特に[ʃ]の場合後ろに[ir, i]という平唇 (spread) 狭母音が続く場合に日本語[シ]の様になってしまっ忘れてられ、誤った発音になる。」p. 49)。

## 10) [jɾə]

半母音・涉り音の[j]は、母音[i]の前舌が一層硬口蓋に対して狭めを強くした際に生じる雑音を伴う音と云え、故に半母音である。涉り音なので発音時間 (duration) は極めて

短く直ぐ次の母音に移行する。しかし、一瞬でもその硬口蓋との間の狭めが強くなる際の緊張を伴った音で発音されないと、直後に[i]や[i]のような高狭前母音が続く場合には、“ear”---“year”のような語の識別に関わる。その意味で学生達の発音は、コミュニケーションの観点からは「通じない」訳ではなかろうが、音声学的には[i]の直前の緊張が不十分で不正確だと云わざるを得ない。更に、この高狭母音[i]から米音独特の r-colored[ə]への滑らかな移行や調音もできていない。尚、以前の考察にはこれに関係する指摘はなされていない。

### 11) [str] [sp]/ [k] [pr]

[str]が含まれた“frus・trat・ing”は語強勢が本来第一音節に置かれるべきで、第二音節の[ed]に置かれた誤りが非常に多いことは別として、[str]という子音群が音節の境を跨ぐとはいへ途中で余計な母音を挿入して発音してはいけないものである。年度によるバラツキはあるが、/ストレ/或いは/ストゥレ/のように余計な母音を挿入して発音されている。更に、[s]の直後に無声破裂（閉鎖）音（/p, t, k/）が続く場合は破裂が起きない（respond は又 re・spond という風に音節が分かれるので、[sp]は一層緊密に繋がり破裂音のエネルギーが[s]に取られて[p]の直後の氣息（aspiration <sup>h</sup>）には至らない）。[str]の場合も[t]の後の aspiration は起こらず[r]の無声化も起きない。このような例では[s]の調音の正確さと前後音との繋ぎ方が要になると云えよう。それが上手く出来ていない例が多い。

又、「語頭の破裂音+l/r」の繋がりでは、これらを含む音節に語強勢が置かれる場合、先述の無声破裂（閉鎖）音（/p, t, k/）の直後に氣息（aspiration <sup>h</sup>）が/l/や/r/に作用して無声化が起きる筈だが、“clearly”や“practice”でそれらが正しく発音されていない場合が極めて多い。このことは以前の考察でも重大な問題として「英語では、語頭、音節頭において [p, t, k] の破裂音に[l, r, w, j] のいずれかが後続する場合、それらは無声化されるが（中略）、特に l, r が後続する場合に無声化が起こっていない例が多く見られる。」（p. 50）という風に論じられている。

### 12) [t<sup>h</sup>]

上記 11)との関連で云うと、“takes”や“time”の場合にも当然語頭の[t]の後に氣息<sup>h</sup>が生じる筈だが、氣息を伴わない不正確な発音が非常に多い。この極めて英語的音声現象には授業中にも意識の喚起を結構するのだが、26 年度以外は中々内在化まで持って行けていないようだ。以前の考察では、上記引用部分に加えて、「3. 子音」の「3.1. 破裂[閉鎖]音」の中でも「破裂音に関して最も問題になるのは、語頭、音節頭(initial position) で /p, t, k/に氣息(aspiration) が伴うという現象（つまり[p<sup>h</sup>, t<sup>h</sup>, k<sup>h</sup>]となる）がうまくとらえられていない点である。これは英語発音の場合の呼気量と呼気の使い方ということと不可分であり、日本語において、普通には英語の場合ほど呼気を有効に使用しないことに原因する。」（p. 49）と断定されている。

### 13) [dʒ]

“major”における[dʒ]は破擦音という意識でしっかりと舌端を歯茎に押しつけてから、閉鎖を開放しながら摩擦音に移行することを運動感覚的に内省できれば難しい音ではないのだが、中途半端な調音だと[z]かʒ/ (ヂ/ではなく) のような摩擦音で発音されてしまう。カタカナ語の「メジャー（リーグ）」等が影響しているのかも知れない。以前の考察には今回のような語中における調音不備に関しては記述がない。

## 14) [b]

“problem”の語中にある[b]は子音連続として途中に余計な音を入れず、更に[b]の調音をする時には既に舌尖と舌端を歯茎前部・前歯の付け根辺りにしっかりと付けて[l]を準備し同時調音的に素早く発音しなければならない。更に、語頭の[pr]とは[a]という母音を挟んで/p-b//r-l/の音連続が並行的に対立しているのが、これが一層至難となる。分綴では“prob・lem”だが、発音時には[pra・bləm]という二つの音の塊に一端分けて発音し、次第に両者を素早く繋いで発音する方法が最も有効である。

## 15) [l]

“listen”における語頭の「明るい l」の間違いが思いの外多いが、年毎に減っていることから観ても、舌尖と舌端を歯茎前部・前歯の付け根辺りに付けて clear [l]をしっかりと調音すること以外に方法はない。授業では舌を歯茎から離す際に一度押しつけるようにしながら、歯茎に少し引っ掛かる感じで弾くように離せ、というような指導をする。それで響は格段に佳くなる。要は内在化と定着化の問題だと思う。

## 3. 調律特徴

- 16) 3年間の診断文に記したリエゾン及び話調 (intonation) の表記は、模範朗読の読みを示している。systems では第一音節は低い位置から始まり、第二音節に掛けて上昇する読み方になっている。そう読んでいないものが 25 年度 3 名、26 年度 7 名いた。rules は末尾が下降上昇で以降に続くような抑揚に、speak は言い切りのそれ、well も同様、say to them の部分は to them が何れも弱音節なので文強勢はその直前の say にあり、この語の途中でピッチが下降する。listen、think は何れも低から高へ次第に上昇する話調で読まれている。これらのピッチの操作が旨くない場合が若干観られた、という程度であるが、英文全体の英語らしさはこうした部分的ピッチ変化の上手な操作に加え全体的なリズムの取り方等にも支えられているもので、その観点からすると未だ未だ学生達の読みの深化は足りないと云わざるを得ないだろう。「学び」は「まねび」を実践するに如くはないのだから。

## IV. おわりに


学生達の英語発音の様々な間違いの分析結果が指し示していることは、結局のところ、習得にとって難しい発音や音声特徴は幸か不幸か時代を通じてそれ程変化していないということである。相変わらず母音であれば日本語の/A/系列の音に対応する[ɜ:/ə]や[æ]更には[a]や[ʌ]、強勢やリズムとの絡みでは弱母音[ə]であり、子音では[f]、[r]、[ŋ]/[ŋg]、[k] [pr]や[tʰ] (語頭破裂音の後の氣息とその並行現象である l/r の無声化)、その他本文や後註で取り上げた諸音であり、更に調律的諸特徴 (強勢[アクセント]、リズム、イントネーション、ポーズ等) だということである。

日本人の英語発音の「癖」は、今回の分析検討からも相変わらず旧と大きくは違っていない。英語の題名に“persistent(=continuing to exist or occur over a prolonged period [Oxford Dictionary of English, 2nd Ed., 2005])”と記した所以である。がしかし、Catford や Dauer が教えるように、silent practice を通じて調音器官の動きに対して“kinaesthetic

feedback[introspection]”（運動感覚的内省）の能力を養い、それを上手に用いれば、徐々に変化は起こってくる筈である。そして、指導すべき立場の教師自身がその訓練と内省を弛まず行なってゆくことが何よりも肝要だということなのである。（了）

### 註

1) 又、以下は相対的に誤りの数は少ないものの、やはり問題となる追加音である。

- ・ Although, bý, théýre : 語強勢の位置が誤って他の音節（ここでは本来の第二音節ではなく第一音節）に置かれているもの及び本来は置かれない単音節の機能語（function word）に間違って置かれている
- ・ and±, isn't± : +の記号は両者とも直後に不要な/オ/や/ウ/のような日本語母音が付いている
- ・ 話調（intonation） :  で記されている方向にピッチ変化があるべきところがそうになっていない
- ・ speak : 前寄り高狭母音[i:]の調音時の緊張が足りず、[r:]或いは[e:]のような発音になっている
- ・ fozeign, rules, read, write, written, respond : 語頭・音節等の子音の[r]の調音が不十分で日本語ラ行音のようにになっている
- ・ fluently : [u:ə]と一端緊張した後ろ寄り高狭母音[u:]から弱母音[ə]への移行が不正確で、前者は日本語/ウ/に、後者は/エ/に近く発音されている
- ・ an, accent, can, to, them, difficult, pronunciation, natural : 何れも強勢音節以外で弱母音[ə]で発音されるべきところが一番近い日本語母音ではっきり発音されたり、余計な強勢を伴って発音されたりしている
- ・ educational : [dʒ]でも[dʒ]でもなく、日本語/ドゥ/乃至は/ジュ/のように発音されている
- ・ systems, is : 語尾の[z]が無声音[s]のように発音されている
- ・ students, spend, studying, speed : 英語では語頭・音節等の閉鎖[破裂]音の直前に[s]が来ると破裂後の aspiration は無くなるのが普通だが、[s]の摩擦が少ないためなのか[t]への滑らかな涉りが起きず、aspiration が生じる
- ・ grammatical : gr-の子音群（consonant cluster）の途中で余計な母音が入ったり、米音では有声音（母音）間の位置で前の音節に語強勢が置かれる場合、[t]が有声化（弱化:[v]）して日本語のラ行音のように発音される（flapped）ことが多いが、[tr; tʰ]がその音でなく/チ/のように発音される
- ・ shown : 二重母音[ou]が[o:]のように発音される
- ・ country, another : 中舌中母音の[ɹ]が開きの大きい日本語の/ア/系列の音で発音される
- ・ rules, able, well, people : 所謂音節中位か末尾に生じる「暗い」[dark “r” : [ɹ]] が暗い音色、日本語に譬えれば/オ/か/ウ/の響で発音されていない
- ・ very, often, difficult : 唇歯摩擦音[tʃv]の調音が不正確で、それぞれ[ɸ/b]で発音されている
- ・ they : 所謂綴り字“th”に対応する[θ/θ̥]で、この場合は有聲の[θ]が日本語/ザ/行音で発音されている
- ・ that : 従属接続詞の that は文中では弱く発音されるべきだが、強勢を伴って強く更に母音もそれに伴って日本語/ア/を強めた形で発音されている
- ・ English : 本来の[j]音が[s]のような不正確な発音になっている
- ・ often, because : Dauer のテキストでは、上記の通りこれらには[oʃən][bɪkəz]という発音表記が振られているが、後者には IPA では本来[bɪˈkoʊz][bɪˈkɑːz][bɪˈkɑːz]等の表記が当てられるところであろう。テキストではこの語は弱形で発音されるとして[bɪkəz]を用いているが、同時にここには実はアメリカの学者の IPA 表記への構造言語学音素論に基づいた一つの特異な考え方が反映されていて、IPA 本来の一音一記号という考え方がアメリカ英語では便法的に用いられていることと深い関わりがある。本題ではないので今はこの点の詳述は避けるが（但し、本論Ⅲの

2) におけるこれへの言及参照)、何れにせよ学生の発音ではこれらの音が日本語の/オ/のような音質で発音され/ オフン/、/ピコズ/のように聞こえる

- ・ they, may, major : 二重母音[eɪ]の出だしが広過ぎて[e]乃至は日本語の/ア/に近く発音されているもの
- ・ problem, respond : 米音[a]が英音[b]でもなく、英語よりは中寄りやや高めめの日本語の/オ/で発音されている

### 参考文献

- Ashby, Michael & John Maidment. *Introducing Phonetic Science*. Cambridge Univ. Press, 2005.
- Catford, J. C. *Fundamental Problems in Phonetics*. Edinburgh Univ. Press, 1977.
- A Practical Introduction to Phonetics*. Oxford Univ. Press, 1988; 2001<sup>2</sup>.
- Cook, Ann. *American Accent Training, 2<sup>nd</sup> Ed (w/ 5 CDs)*. Barron's Educational, 2000.
- Dauer, Rebecca M. *Accurate English: A Complete Course in Pronunciation*. Regents/Prentice Hall, 1993.
- Ladefoged, Peter. *A Course in Phonetics, Fifth Ed*. Thomson, 2006.
- 南 太一郎「日本人学生の英語発音上の問題点への一考察(1)」『宮崎大学教育学部紀要 人文科学 59号』 1986.
- 「アメリカ英語のいわゆる「そり舌音」再考」『宮崎大学教育学部紀要 人文科学 61号』 1987.
- 「英語の[s, z]音再考(1): 動的音声学あるいは同時調音から観た調音点と調音法(1)」『宮崎大学教育学部紀要 人文科学 73号』 1993.
- 「英語の[s, z]音再考(1): 動的音声学あるいは同時調音から観た調音点と調音法(2)」『宮崎大学教育学部紀要 人文科学 75号』 1993.
- 中野一雄『英語母音論』学書房出版, 1972.
- 『英語子音論』学書房出版, 1973.
- O'Connor, J. D. *Better English Pronunciation, New Edition*. Cambridge; Seibido(Reprint), 1982.
- Roach, Peter. *English Phonetics and Phonology: A practical course*. Cambridge Univ. Press, 1983; 2009<sup>4</sup>.
- 竹林滋『英語音声学』研究社, 1996.
- 鳥居次好・兼子尚道『英語発音の指導』大修館書店, 1969.
- 『英語の発音 ---研究と指導---』大修館書店, 1962 ; 1972<sup>7</sup>.

(2015年2月2日受理)